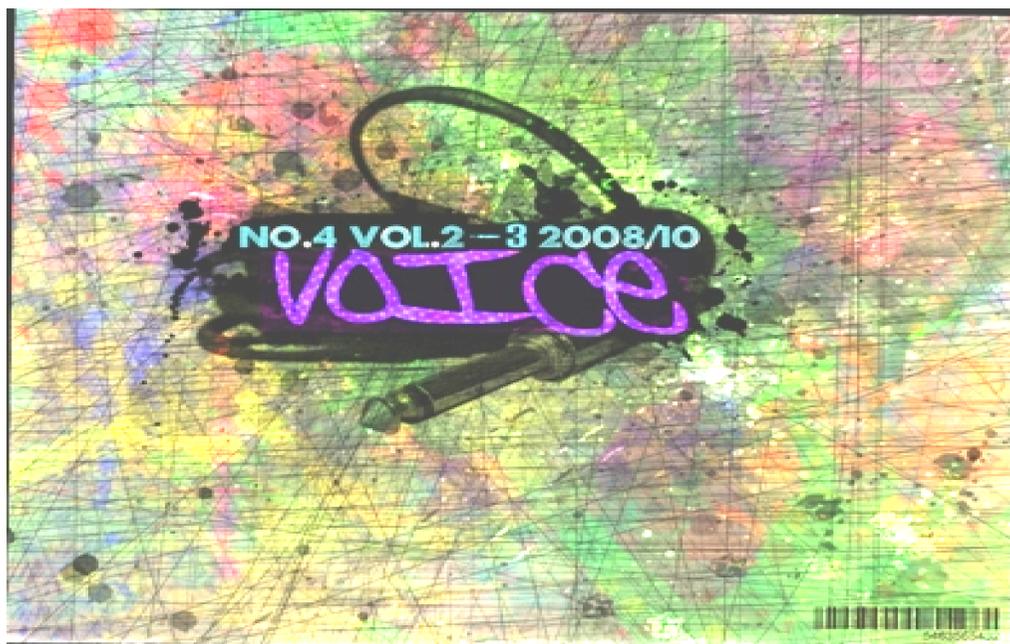


ヴォイス ~ 森の声 ~

4号 vol.2-3 2008/10/24

中・高校生 協同編集による

クリティカル・カルチャー・マガジン



1部：特集 1「リアル 反貧困」2p

2「講座；自由選択講座*市民講座」14p

2部：「CultureCornerかるちゃー

サンバ 重山 安本*演劇 井手*読書 板垣 塩瀬 中島」19p



3部：「Colum コラム」

留学から帰ってきて 29p 土曜日の朝 31p 今、興味があること 32p

自由の森学園の問題 / 表現祭の問題 33p



~ 2008/10/18-19 表現祭 (中島大地) ~

特集 リアル 反貧困！

いま、なぜ「保健」で反貧困なのか

「貧困」は単なる経済問題ではない。

日本社会そのものが崩壊の危機に瀕しているのである。

湯浅誠

「保健」の授業と「貧困」問題と、一見関係なさそうですが、実はそうではありません。貧困問題は、私たちが健全な生活を送るために避けて通れないものです。

教科「保健」は、「学習指導要領」では、大きく三本柱（単元）で構成されています。

- (1) 現代社会と健康：応急手当、薬物乱用、ストレス対処など
- (2) 生涯を通じる健康：性行動、妊娠と出産、家族計画など
- (3) 社会生活と健康：食品と健康、働くことと健康、労働災害など

今回の講座のテーマは、(3)の「働くことと健康」に含まれるもので、なかでも「働くことと健康」「労働災害」と深い関係があります。すなわち職場環境の変化に伴って生じる健康問題、および生存権という領域です。たとえば、過労死や、一日8時間働いても生活が成り立たない低賃金労働という事実は、私たちの生存権を脅かすものであり、さらに労働災害にも派生していきます。現在の日本は、表面的には豊かな生活が営まれているように見えますが、実際には格差が拡大し、勤勉に仕事をしていても食べていけない「ワ・キングプア（働く貧困層）」が増加しています。

今回の講師を務めてくださった湯浅誠氏は、この問題に20年以上取り組んでいる方ですが、現在の貧困問題は単なる社会現象ではなく、日本社会が崩壊の危機に瀕しているのだとして、「私たちの健全な生活を守るために、『反貧困』の声をあげ、セ・フティネットづくりをしていかなければならない」と主張しています。

「保健」は「いのち」全般を広く扱う教科ですから、貧困問題は「保健」の重要なテーマなのです。

西田 隆男（保健室）

湯浅誠さんの話を聞いて 1

自分は中学3年のとき、グループ学習(『生きさせろ!』チーム)の一環として、湯浅さんのはなしを聞きに言ったことがある。つまり今回、おはなしを聞くのは2回目だった。

自分は、今回の授業の中で、湯浅さんに質問した。

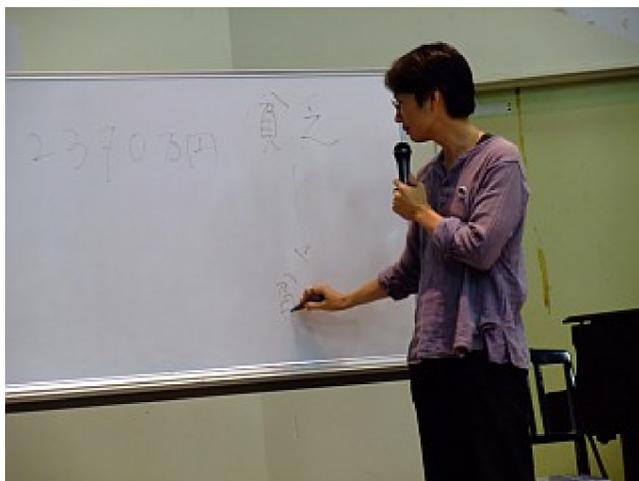
「最近、以前よりもだいぶニュースや特番などで反貧困活動のことや、貧困問題について報道されていますが、いま現在はどういう状況ですか？」

湯浅さん

「現場を見た人は、誰もがこれは醜いともらします。しかし、テレビや新聞というものは、常に新しい話題を求めます。それに購読者・視聴者も同じ話題が続くのでは飽きてしまいますからね。いくら現場を見た記者さんが記事にしようとしても、編集する側(デスク・ディレクター)がそれを許さないんです。

そういう現実があるので、テレビや新聞を安易に批判するのではなく、少しでも貧困に冠する記事や放映をしたらほめてあげてください。そうすれば現場の記者の力になります」

湯浅さんの返答を聞いて、マスコミの中でも真剣に記事にしてくれようとする人がいるんだなぁ、と思った。しかしそれでも、貧困・反貧困に関する報道は、日々少なくなってきた気がする。



これから今まで以上の行動を起こしていくには国内全体での一斉活動や、国外の人たちとの連携活動といった手段も必要になってくるのではないかと、思った。

中島 大互(高1)

湯浅誠さんの話を聞いて 2

湯浅さんのお話をお聞きするにあたって、私は少しの覚悟を持って行った。なにしろテーマは重たい。

湯浅さんの第一印象は「若い」。(39歳とのことだが、もっと若い印象だった)そして「何かに怒れる人」のシャープな顔つき。

現場の具体的な話が聞けるのか?と想着ていたが、この高1向けの授業ではそうではなかった。数字をたくさん用いて、問題の本質をあぶりだす。一連の話を通して、湯浅さんは、「君達、他人ごとではないよ」その一点が伝わればよいと考えたのではないか、と私は思った。

「生きさせる」チームをはじめ、すでに問題意識を持っている人たちは別として、その場にいる一人ひとりの意識はバラバラだ。「若い君達こそが、変えていかないと」「他人のためになることをするって、生甲斐を感じるよ」湯浅さんはどちらかといえば淡々と語っていたが、そこに「つながっていこう」という熱いメッセージを感じた。

「現実はわかった。じゃあ、どうしたらいいんだ?」現実を知った後、この難問と閉塞感にぶちあたる。

湯浅さんは、私たちが明日からでもできるいくつかの具体例を出してくれた。「マスコミの中で、現場を知る心ある記者たちは上層部との葛藤がある。よい記事が出たときには、“よかった”と反響を返すことが応援になる」「物を買うときに、その企業の姿勢を問え」

私が個人的にもっとも印象的だったのは「(すっきりと)解決する策はない。でも、できることはたくさんある。それを探ること、そのこと自体が僕はおもしろい。」という言葉だった。

どんなに社会的意味のある活動であっても、楽しさがなければ続かないと私は思う。湯浅さんは、活動のどこに楽しさを見出しているのだろうか? というのも、知りたかったことのひとつだったので。

やっぱり話を聞いてよかった。「こういう人がいる」「こういう人の話を聞いて学ぼうとする若い人たちがいる」という現実、私にとっては希望につながる。

先日、鬼沢さんが話してくれたことを思い出す。【「生きる力」とは、個人の中に力を蓄えることではなく、他者とつながる力。】こんな話を聞くことができる学校で、親としての自分も、厳しい現実が横たわる社会で生きるための「足腰」を鍛えてもらっている。

主山 しのぶ(保護者)

湯浅誠さんの話を聞いて 3

働いても生きていくことができない社会。働き口が見つからず、日雇いでどうにか生活していても、その人が甘えていて頑張っていないからだと言われてしまう社会。

好き好んで日雇いで働いている訳ではないだろう。企業が使い捨ての労働力を安く、使いたいときだけ使うという姿勢だと企業にとっては、人件費を安く押さえることができ、好都合だろうが、働く方にとっては、不安定で未来のことを考える余裕もなくなってしまうだろう。

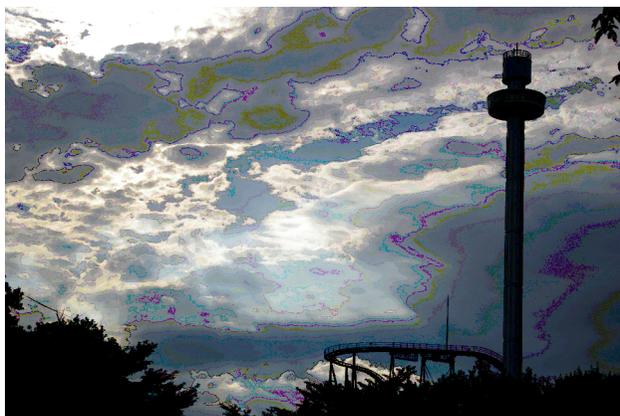
企業は、商品を売るだけでなく、雇用を担っていくということも社会的に必要なことだと思う。それを放棄しているとしか考えられない。正規で働いている人たちも、残業が多く、過労死の問題も生じている。

企業は、正規採用を増やし、残業時間を減らし、今の一人分の人件費で二人を雇うことはできないのだろうか。一人分は少なくなるだろうが、ひとは残業が減り、ひとは雇用の機会を得られる。残業が減れば、余暇の時間が増えるだろうし、子どもと接する時間も増える。料理をする時間だって増えるから、健康にも良い。地域での役割も担うことができるようになるし、いいこと尽くめだと思う。

多くの人が人間らしい生活ができ、一石二鳥だと思うのだが、ただ難点はひとりの人の賃金が減ってしまうということ。それは、増えた自分の時間の中で楽しみながら工夫するということで、解決できないだろうか。

みんなが人間らしい労働時間と、生活時間を持つ社会になって欲しいと思います。

板垣 規子 (保護者)



生きさせる！

中学3年森の時間・生きさせる！チームの流れ

2007年10月31日 生きさせる！チーム動き出す

2007年11月28日 湯浅誠のはなしを聴く

2008年 1月27日 炊き出しに参加・路上生活経験者と喋る

2008年 2月21日 学習発表会にて報告

2008年 2月27日 雨宮処凛のはなしを聴く

その後・・・

2008年 7月13日 市民講座にて報告

2008年 9月17日 湯浅誠、高1保健講座で「反貧困」を語る

2008年10月26日 雨宮処凛、公開研のゲストとして登場する予定

「飽食の時代」などといわれている今の日本にも餓死する人がいます。
貧しさゆえです。



2007年度、中学3年の後期森の時間では、「わたしたちの未来」という大テーマのもと、5つのチームに分かれて学びを深めていきました。その中の1つに現代日本の貧困問題の状況を知ろう、というグループがあります。『生きさせる！チーム』といます。

だいたい16人くらいの人が集まりました。

アフリカ・東南アジア（俗に言う発展途上国）などの貧困問題はそれなりに知られ、語られてきました（解決はしていないけど）。しかし、ここ数年、ヨーロッパ・アメリカ・日本などの国々（俗に言う先進国）の貧困が大きな問題となっています。

どうして、「先進国」に貧困が生まれたのかというのは簡単に説明できることではないとされます。ですが、最も大きな理由としてグローバリゼーションの影響があげられます。「地球規模の経済活動の活発化」とでも言えば良いのか。国境に

とらわれない貿易を促進しようという流れの加速化と言い換えても良いかも知れませんが。

それによって、競争が煽られました。誰かが安いものを売ると、他の誰かがそれよりも安いものを売り出し、また他の誰かがもっと安いものを売るというふうにして、どこまでも物が安くなっていったのです（地球規模の、徹底的な「価格破壊」）。

でも無から有はつくりだせない。原材料費などを切り詰めて切り詰めて極限まで切り詰めていくと、あと削れるのは人件費くらいしかありません。企業と国家は儲けることを最優先しました。そして、その結果どこの国でも、ワーキングプア（働いても貧しい層）が生まれました。

今、日本の働いている人の3割は、非正規雇用です。若者に限って言えば5割を超えています。女性だけみても、5割を超えています。不安定雇用の場合、一般的に年齢があがっても給料はほとんど増えません。そもそも出世することができません。しかも使い捨てです。

さて。では、どうやって貧困問題と向き合っていけば良いのか。世界規模の流れなのです。向き合うも何も流されるしかないのではないか、という気がしてきます。そこで思いつくのはサバイバルを勝ち抜き、1人だけのしあがって「上流階級」の末端に連なろう、という生き方。

だけど、世の中は不公平です。親が貧しいと子どもは教育の機会が奪われるという現実があります。「教育格差」といいます。日本は、学歴によって差別がある国です。学歴によって就ける職業が決められてしまいます。 お金持ちの家に生まれた子と貧しい家に生まれた子の間には恐ろしいほど深い溝があるのです。貧困を肯定し、格差の是正を訴えることを忘れて、その溝はどんどん拡大していきます。上流・中流・下流の階級社会。まるで中世のようです。だけど事実です。貧しい「下流」の人にとっては、サバイバルを勝ち抜いて上流を目指そう！ という意見はあまり現実的ではありません。



それではどうすれば良いのか？

昨年の『生きさせろ！』チームでは、そこから先を考えていこうとしました。貧困と対峙し、「NO！」を突きつけるために闘っている人たちが日本には大勢います。「もやい」(路上生活者の支援)や、新宿連絡会(路上生活者の支援)、フリーターの労働組合などです。そういった人たちに出会い、何を目指して進んでいるのかというはなしを聴きました。

キーワードは、「連帯による『反貧困』活動」。新宿連絡会は、週一回炊き出しなどを行っている組織です。ボランティアによって運営されているのですが、そこにはかつて路上生活者だった人も参加していました。互いに蹴落とすのとは逆です。みんなが助け合っていこう、という考え方が根付いています。



日清戦争のときの日本軍の死者は、約1万3千人でした。ここ数年、日本では毎年、3万人以上の方が自殺しています。貧困・格差が巣食う「生きづらい」社会は、戦場と同じです。むしろ、見えにくいという点においてはより悪辣です。「もやい」事務局長の湯浅誠は、貧困をオバケ

ケに例えていました。「貧困は見えるようで見えない、みんながしっかりと考えていかないといつか悪さをする」。みんなが手を取り合って、貧困を監視していくことが必要です。

貧困を社会の構造の一部に組み込んで、金儲けしようという企業・国家(を牛耳る人たち)の姿を見抜く目と思考をまずは養っていき、そして導き出された答えに応じてしっかりとした行動をとることが出来るようになったらより良いなあと思います。

中島 大地(高1)

ウェブサイト：生きさせろ！ 自由の森学園

<http://www.cablnet.ne.jp/~jimoren/kisasero/>

ウェブ上に学びの過程を詳しくまとめています。2007年度10月から始まった『生きさせろ！』チームの学びは、このヴォイスの紙上だけではまとめきれないほど広いです。ぜひウェブサイトを見てみて欲しいです。

学ぶことと生きることをつなぐ

雨宮処凛さんをお招きしての

公開研シンポによせて

問題。

「近頃、24時間営業のマクドナルドには、ある張り紙が目立つようになった。それはどんな張り紙か？」

「正社員でも年収が200万円に届かない人は何%か？」

「母子家庭1世帯あたりの年間平均所得はいくらか？」(答えは文末に)

これは、『アエラ』9月8日号付「格差検定100問」から拾った問題の一例だ。問題の作成者は、今回シンポにお招きする、作家・雨宮処凛さんや「反貧困運動」に取り組む湯浅誠さんらである。ことほどさように、ここ1~2年、貧困や不平等をめぐる問題が、さまざまな形でメディアに取り上げられている。言うまでもなく、それは、かつてないほど深刻化した雇用や生活の破壊と崩壊状況の反映である。

「一体、いま私たちの生活と働き方、働かせ方に何が起きているのか」「大きな変化の背景には何があるのか」「この時代に私たちはどう生きていけばいいのか」。これらの問いは、単に若者・青年のみならず、いまこの時代と世界に生きる人々にとって、切実で重要な問いである。

というわけで、今回の公開研シンポでは、雨宮さんと教育学者・佐藤隆さん(都留文化大)をお招きし、いま、この時代に学ぶことと生きることの困難と希望をテーマにすえることにした。

雨宮さんについては、単純な紹介は困難だが、敢えてひとことと言えば「生きづらさ」と向き合い続けてきたひとである、と紹介したい。壮絶なイジメ、バンドの追っかけ、リスカ、オーバードーズ、右翼団体やパンクバンドでの活動…。常に「生きるとは何か」「なぜ生き難いのか」という問いと向き合い、もがき続けてきた。現在は、生活も職も心も不安定にさらされている人々=プレカリアート問題に取り組み、精力的に活動をおこなっている。事実、彼女の膨大な著作の中

には「生き」るの文字が多く使われているものが多い。『生き地獄天国』『すごい生き方』『生きさせろ!』『「生きづらさ」について』など。人によっては、彼女の政治遍歴を「右翼から左翼へ」という人もいる。しかし彼女はこう言う。

「私の視点はほとんど変わっていない。結局、モノとお金だけの価値観、人の命や生活よりも利益が優先される社会が嫌だ、ということなのだ。(中略)この社会と生きづらさを絡めて考えると、やはり今の資本主義のあり方に疑問を感じるのだ」(『右翼と左翼はどうちがう?』)と。

そう、つまるところ現在の貧困や不平等の問題は、「今の資本主義のありかた」に行き着く。

もちろん、今回のシンポにおいて「今の資本主義のありかた」を突っ込んで検討は出来ない。ただ、私たちの眼前に広がる、多くの社会問題を芋づる式にたどっていけば、どうしても「今の資本主義のありかた」、別の言い方をすれば「グローバル化」に行き着かざるを得ない、このことは押さえておく必要がある。

そして、その「資本主義のありかた」に相当に引っぱられ、戦後、日本経済の「子分」としていいようにパシリにされてきたのが「日本の教育」だ。国家のための教育はもとより、いかに経済成長・発展のために教育が利用できるか、活用できるか、という観点で日本の教育が語られ、運用されてきた(言うまでもないが、その流れに抗して建学されたのが、自由の森学園である)。

したがって、現在の日本の教育の問題と困難 いじめ、不登校、学ぶ意欲の喪失、競争・管理・効率性の追求などは、単に教育の枠内で問題をとらえようと思っても、それでは納まりきれないものなのだ。

今回のシンポでは、激変を遂げている、生活と雇用の問題と、学校や教育が抱える困難をトータルにとらえて、先に記した問いをともに深めていこうという意図がある。漠然と今と将来に不安を抱えている人、何となく生きづらさを感じている人、今の日本や教育のあり方に大いに疑問と批判を持っている人、これらの人々にこそ、このシンポへの参加を呼びかけたいと思う。

最後に、冒頭の問題の答えを記して、小文を閉じたい。

「居眠りをされる方」お断り

「約12%」

「約122万円」

菅間 正道(社会科)

みんなに知ってもらいたいページ

9理の会のやっていること

今年、10月に新潟越後湯沢で全国フボコンが開催されました。全国のいろんな学校から生徒・父母・教員・その他市民が参加しました。300人くらいの人が集まったのかなぁ、多分。自由の森学園からは生徒4人が参加しました(自森生が埼玉代表ということになるなぁ・・・)。

去年に続いて今年も、平和学習についての分科会では自由の森学園が報告をしました。今回は、自由の森学園9条の会の報告などをしました。

そのときの報告と報告にいたるまでの流れを、ヴォイスに書きたいと思います。

これまで、ヴォイス2号(9条世界会議に参加して、アーサー・ビナード公演、イラク派兵意見判決の3つの意義)でも、ヴォイス3号(「命どう宝」とキューリ)でも、憲法がらみのはなしを何回も取り上げてもらいました。それらの、今のところの総括にもなると思います。

5/4、5、6のゴールデンウィークに、幕張メッセで9条世界会議が開催されました。1日だいたい1万人以上もの人が集まり、全国(各地で同時開催)では3万人以上の人に参加したビッグイベントでした。詳しいことはぜひヴォイス2号を読んでほしいのですが、とにかく凄かったです。世界中から「9条」という1つのフレーズに惹かれて1万人もの人が集まってくるのです。



そこに自由の森学園の有志の人たちが乗り込んでいき、ブースを出展しました。参加したことで、たくさんのものを受け取りました。逆に、若者が憲法に

関心を持っているということを伝えたその行動は、大人を元気付けることにもなった、と多くの大人から言われました。

そこでこのまま終わりにしてはもったいないということで、「自由の森学園 9 条の会 9 理」をつくりました。9 理の会は、出入り自由な有志です。憲法のことにはちょこっとでも興味があるならば、参加してみしてほしいというスタンスです。主にやっていることは2つ。校内での学習会と、校外のイベントへの参加です。

学習会は、今のところ2回しかひらけていません。忙しいことを言い訳にしてはダメなのですが、放課後もけっこう忙しいので今行き詰っているところです。表現祭・公開研が終われば出来るかなあ、という感じです。

校外のイベントへの参加は、順調です。最初はどうすれば良いのか途方に迷っていましたが、今ではいろんなところからお誘いを受けて自分たちが舞台の側に回ることもけっこうあります。ホールでのイベント『「命どう宝」平和を唄え・語れ・舞え・遊べ』、芝生でのエコイベント『WATER GREEN』といった1000人以上の人が来るイベントでも、自分たちが見る側ではなくてやる側となって踊ったり、展示したりしました。



そのような9理の会の流れをフボコンでは報告させてもらいました。その中で、いろんな質問・疑問・感想をもらいました。基本的には、好意的に受け止めてもらえたようです。高校生によって構成され、校内を中心に活動する「9条の会」と

というのは、多分自由の森学園にしか存在しません。

「9理の会」の活動がより発展すれば、そのときは校外からも注視されるような存在になる可能性もあります。自由の森学園を広めるという意味でも、有意義な活動になるかも知れないと思っています（かえって反発を招くかも知れないけど）。ちょっと楽しみです。

中島 大地 (高1)

← みんなに知ってもらいたいページ

わたしたちは

公立の生徒と何が違うか？

高3になって、大学の学費一覧を見た。中3の入試前にも、自由の森の学費一覧を見たことを覚えている。

「私立の学費は高い」のがあたりまえになっている日本社会。わたし自身、私学助成金活動に関わる前はあたりまえに思っていた。今、自由の森の中で「あたりまえではない」と意識しているひとが何人いるだろう？

私学助成金とは、国や県から家庭や学校に出される補助金のこと。自由の森のある埼玉県は学校への運営費補助が全国最下位。これを聞いて「へえーそうなんだ」くらいにしか思わないそこのあなた！ そうなんだではない。「おかしい」と思わない？ 同じ高校生に使われる税金に5分の1という差があること。保護者が払う学費の差が約7倍もあること。この差はわたしたち生徒が公立に通うか、私立に通うかで生まれてくる。

それのどこがおかしいのか。日本は憲法で「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、等しく教育を受ける権利を有する。」と記している。わたしたち生徒は、自分の行きたい学校に行って、受けたい教育を受ける権利を持っている。なのに、家の都合で行きたい学校に行けなかったり、入学式や卒業式に参加することなく退学せざるを得なかったりする現状があるのだ。

それを変えていくために、署名というのがひとつある。署名には本人の了解があれば未成年(つまりわたしたち)も書けるし、代筆も可能だ。ただし、署名には「数」がないと力が弱い。自由の森では各家庭に署名用紙が配布されている。どうか家に帰って確認してみてほしい。教育を受けるわたしたち生徒が動いていかなければならない。私立に通っているからこそ「おかしい」と思ったことを「おかしい！」と叫ばなければ、変わっていかないのだ。あなたが動いて、変わることがある。高校生だからこそ出来ることがある。そのことを考えてほしい。教育に公平を！

松永 育子(高3)

特集 講座 自由選択講座

日本文学鑑賞

授業者；原 裕子 (日本語科)

文章を読むということにも、いろいろあると思う。あらすじを読む、だったり、文脈を読む、だったり。

日本文学鑑賞では、あらすじの後ろに隠れている意味を読むということをしている。様々な作品を読み、考えを深めて、その考えや見えてきた読みを、皆に発表したりいっしょに考えたり。もちろん、人それぞれの考えや読み方があるし、一つの作品にも、これと決まった答えはない。だからこそ、人の意見や発言は大切だと思う。小さな教室で、少ない人数ということもあってか、喋りやすく聞きやすい環境のなかで授業している。盛り上がってきた時の、いろいろな意見のとびかう瞬間は、一人では味わえない読む楽しさのある時間だと思う。

この講座では、近代から現代の作家の作品を扱っている。誰にとっても新しい作家や本に出会える確実な機会でもあるし、馴染み深い作品を、親しい眼で読めたりする。このようなことが授業でできるって、魅力的だと思うのですが、日本文学に興味があるなら、この講座をおすすめします。

公開研では、コズエさんが坂口安吾の「夜長姫と耳男」を読んだのレポートを発表してくれます。

深沢 周(高3)



東アジア現代史

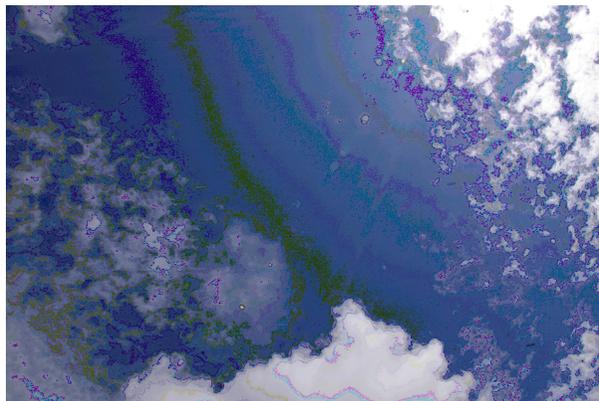
授業者；渡辺 礼一 (社会科)

礼一さんの授業は、礼一さんの社会に対する熱い思いみたいな強く感じる。時に熱さをおさえきれず手に力が入ってチョークを折ったりしている。でもそんな礼一さんの姿を、私はかわいらしいなと思ったりする。

今年の公開研究会、高校は選択授業ということなので、礼一さんになぜ「東アジア現代史」を教え始めたのか話してもらった。「東アジア現代史」は10年前に始まった。その当時はまだメディアも今ほど東アジアのことを取り上げておらず、生徒もほとんど東アジアについての歴史を知ってはいなかった。東アジアは日本の隣でこれからずっと付き合いいかないといけないのに、生徒が東アジアのことを知らなすぎる。と礼一さんは思ったのだ。

今回、礼一さんと話をしているチョークを折るほどの思いの一部をすこし聞くことができた気がする。人間の間違いと歴史を見つめて、同じことを繰り返さないようにこれからの平和な世界のために。そういうことを話してくれた。なるほどチョークが折れるはずだと思った。色々話してくれてありがとうございました。

小金沢 基 (高2)



飯能地域研究

授業者；岩田 大樹 & 杉田 優子

まず、この授業を「知りたい」と思ったのは一目見て「何をやっているのだろう」と思ったからだ。それと、ちょっと「この講座、受けてみようかなあ」と、考えたものの、やめたからだ。

飯能地域研究というのだから飯能の町のことについてやるのはわかっていたが、実際、何をやっているのだろう。そこをこの講座を立てた大樹に聞いてみたところ、この企画は駿河台大学と合同で行っていて、プランニングコンテストというものに出展するために飯能銀座商店街に取材に行っているそうだ。プランニングコンテストというのはその町をよりよくするために一般の人や団体からいろいろな案を出してもらい、その案の中で受賞案を実際に町で行う。というもので、どういう案が出ているのかというと、飯能銀座の中間辺りに空き地があるのだが、そこで自森だけでなく、聖望学園や飯能南高校などの学校にも呼びかけて小さい祭りをやろう！！という企画を考えているらしい。

今、この講座には四人いるのだが、その一人一人が案を持っていて、いまはその案をみんなで話し合っているそうだ。気になったのだが、それは教えてくれなかった・・・。楽しみに待っていようと思う。

この講座を取材するまで飯能銀座がこんなにも寂れてしまっていることを知らなかった。僕が飯能銀座を通るのは基本的に夜だからいわゆるシャッター通りになっていることにまったく気がつかなかった。結構なんだかんだで店がいっぱいあって、便利なところ。位にしか思ってなかった。それが、ほんとに危ういところまでいってしようとは・・・。こんなことが日本のあちこちであると思うとぞっとする。



こういう活動がもっといろいろなところでやるようになったらもっと地域に活気が取り戻せると思う。で、それをやるのは大人ではなく若い力で地域を押し上げていかなければいけないのだと思った。

板垣 奏男 (高2)

特集 講座 市民講座

『インドのお寺の変な修行』

講師；中野 裕 (数学科)

市民講座の『インドのお寺の変な修行』の取材？みたいな感じで見に行ってきたよ～

この『インドのお寺の変な修行』は、中野 裕さん（自森の数学科）が講師で、数学が好きな僕にはぴったし！みたいな感じで...だから見に行きたいなあ...と思って行って来たのだよ～

市民講座にいっぱい人が来ていたよ～

市民講座で出た問題は、ハノイの塔の問題だった！

みなさんは知っていますか？ 一枚の台の上に3本の棒が立っていて、一本の棒に8枚の円盤が置いてあって、この円盤はピラミット状に積まれているやつ！

そして...授業を受けてみて...

ハノイの塔って最初は結構簡単な問題かと思っていたけど...うまくできなかったなあ...。 なんか...ハノイの塔ってパズルゲームみたい...なんて思っていて、ぼくはパズルって苦手...だからハノイの塔はちょっと苦手だなあって思った。

なんども失敗していたなあ...うまく違う棒に円盤を全部移せなくて...

円盤が4枚だとできるのに5枚になると急にできなくなっちゃったり...でも、何度も失敗を繰り返していくと...成功しちゃったりしたよ～

意外と計算しながらやったりするとできちゃったよ。

感想

この市民講座に行っているいろんな人が見に来て、大人の人やどっかの先生や小さな子供がいたけど、ほとんどの人は数学って苦手...だけど、市民講座が終わって感想を聞くと、「楽しかった」ってみんな言っていて、苦手だと問題の意味がわからないから楽しくないと思っていたけど...この市民講座に来てわかった。

教師の教え方で楽しいか楽しくないってかわっていくなあってことがわかった。

もしも...将来は教師になるとしたら楽しい授業をしたいなあ。

押立 敏樹 (中3)

『ミッキーの市民講座』

講師；後藤 幹 (理科)

9月14日(日) 埼玉県上尾市で、自由の森の理科教員ミッキーの市民講座がありました。

市民講座は、教員が普段生徒にしている授業をして、自由の森をいろんな人に広めていこうというものです。会場には、自由の森の関係者でないと思われる人も、来た人の中で三分の一くらい来ていました。その中には小学生も何人かいて、熱心に話を聞いていました。

ミッキーの授業は、自由の森の生徒は中2でやるものでした。脳についての授業で、最初は、そもそもヒトになぜ脳ができたか、脳がないとどうなるかという話を、チンパンジーや人類の祖先の骨を使って説明していました。それから、実際に鶏の頭を解剖して、脳がどこにあるかなどを把握しました。そして、脳がいかに人間らしいかなどを会場の人たちと考え、最終的には、アメフラシを使った実験を説明していました。

アメフラシは、光が好きで、光に近づく性質があります。一方で、水をかけられるのを嫌います。コロンビア大学のエリック・カンデル教授は、その性質を利用して、実験を行いました。

光をあてて、近づいてきたアメフラシに、水をかけるのです。それを何回も繰り返すと、「光をあてられると水がかかる」とアメフラシは学習し、光をあてると逃げるようになります。つまりアメフラシは、「光があたる」とことと「水がかかる」ことが関係していることを学んだのです。その実験をした後、アメフラシを解剖すると、ニューロン(神経細胞)が新しく枝分かれしていたそうです。学んだことが、頭の中に蓄積されていたのです。「頭がよくなる」ということは、覚えたことと覚えたことがつながっていると気づいたときだとミッキーは言っていました。

その後は、自由の森の紹介などを教員や生徒がしたり、自由の森に関する映像を流したりして、市民講座は終わりました。

私は、この授業を中2で受けましたが、もう一度受けてみても飽きませんでした。それくらい、この授業には「受ける意味」があると感じました。他の学校では、「授業を受ける意味」が、「テストで良い点を取るため」だったり、「いい大学に行くため」だったりします。けれど、この授業は、なにかもっと深い意味を持っていて、芯がしっかりあって、これから生きていく上で、あったら人生が豊かになるような学びだと思うのです。そういうところが、他の学校とは違う、自由の森のいいところだなあと感じました。

嶋本 有里子 (中3)

G.R.E.S. Bosque da Liberdade

自由の森学園高等学校サンバ音楽隊

自由の森でのサンバの歴史

始まりは今から12年前の1996年。当時の高校2年生の学年ワークでサンバの授業を行った。外から講師の方を招いて1日がかりの講座だったが生徒達はたちまちこの音楽にはまった。それから行事はもちろん機会があればどどん人前で演奏した。当時は楽器も今のようにたくさんはなくオイル缶にドラムのヘッドをつけたり缶からを叩いたり今から考えるとサンバとはほど遠いものだったに違いないがそれでも演奏することが楽しく、周りの人たちを巻き込んでの発表はいつもとても盛り上がっていた。

1998年、その生徒達が卒業してしまいサンバをやる人たちがいなくなってしまう。このままだとここで途絶えてしまうので選択講座の中にサンバの授業を立ち上げた。しかし、1日でできてしまったものを1年間の授業にするには僕のスキルがあまりにもなかったので1年間やり終えた後にサンバのプロの方にレッスンについて基本から学んだ。その頃は自分の成長がそのまま生徒達の成長でもあった。

浅草サンバカーニバル



2000年、サンバ講座も3年目を迎え、この年初めて浅草サンバカーニバルに出場した。当時の出場基準は人数が15人以上ということだけだったので気楽に参加することができた。講座生は30名ほど。ダンサーもいなくて衣装もTシャ

ツにアイロンプリントをしたもの。他のチームに比べたら何とも地味だったが、それでもカーニバルの熱気を強く感じ50万人の観衆の前でパレードすることは本当に気持ちよく、ここに出られたことがただ嬉しかった。現在の浅草サンバカーニバルは初出場当時よりも出場基準も厳しくなった。また、パレードコンテストなので下位2チームは次の年の出場権をなくすという厳しい状況だが今年も9チーム中第4位で来年の出場権を獲得している。

浅草までの活動

次の年に向けて動き出すのがだいたい11月終わり頃。まずはテーマ決め。パレードはテーマにそって歌、衣装、ダンスの振り付けを作る。だからこのテーマ決めがとても重要。できるだけパレードで表現しやすいようなものを考える。テーマが決まると次は演奏する曲の歌詞作り。テーマにそってイメージする言葉を出し合う。それをまとめて歌詞を作り上げていく。

4月下旬には歌詞を完成させ、できた歌詞をブラジル人のミュージシャンに送り曲を作っていただく。6月上旬に曲が完成。出来上がった曲はポルトガル語で歌われる。この曲のことを Sarba Enredo(サンバ・エンヘッド)と呼び、パレードの全ての表現が Enredoをもとに作られる。

平行して4月頃から衣装のデザインも考える。アーラ(テーマを表現したダンスの集団)、バテリア(打楽器隊)の衣装を考え試作をする。夏休み前までに試作品を完成させデザインを決定する。

夏休みはお盆の時期をのぞき毎日練習と衣装作り、PA車(音響装置を載せたトラック)の装飾作業に費やす。そして、8月下旬に行われるカーニバルにのぞむのである。

2008年のカーニバル

今回のテーマは「絵の具」。このテーマにそって次のような歌詞が出来上がった。

パレットに絵の具を出して	くもり空みたいな灰色のキャンパスは
真っ白なキャンパスにあなたの絵を描こうよ	白い絵の具でぬりかえて
浅草のキャンパスに	真っ白なくもが広がる青空にして

何を描こうなんて迷わなくてもいい
サンバのリズムを感じながら
思うままに 感じるままに
描いたものがあなた自身

雨雲みたいな涙のキャンパスは
あなたの絵の具でぬりかえて
笑顔が広がる虹をかけよう

大きなキャンパスに絵を描こう
サンバのリズムを感じながら
絵を描こうよ
自分の音をぬっていこう
大きなキャンパスには
いい

パレットに絵の具を出して
真っ白なキャンパスにあなたの

たくさんの人たちの色があふれている
虹のようにカラフルになったキャンパスは
希望の色にあふれている

浅草のキャンパスに
何を描こうなんて迷わなくても

サンバのリズムを感じながら
思うままに 感じるままに
描いたものがあなた自身

この歌詞をブラジル人のミュージシャンであるシキーニョ氏に送りポルトガルの歌詞にして作曲していただいた。直訳ではないがこの歌詞の精神はこわさずにとっても素敵な曲が出来上がってきた。2008年のエンヘッドは「絵の具」だがその中には「浅草を一つのキャンパスに見立てて一人一人が自由に自分なりの絵を描いていこう」という気持ちが込められている。このエンヘッドをもとに衣装のデザイン、ダンスの練習、PA車の装飾が行われる。衣装は絵の具のチューブをモチーフにダンスも絵を描くような振り付けでパレードに出る全ての人たちでこのテーマ

を表現していく。そして、自分たちだけの世界で終わるのではなく、見に来てくださっている浅草の沿道の人たちを巻き込んで一緒に楽しむ。自由の森がパレードしているその時間は私達の絵の具でその空間を染めているのだと言う気持ちをもってパレードにのぞんだ。



カーニバル当日、天気予報はあまり良くなく降水確率は60パーセント以上。パレードの始まる直前にバケツをひっくりかえしたような土砂降りの雨。開催自体が危ぶまれるような雨だったが、カーニバルが始まると雨もあがり、自由の森がパレードしている時間は夏の太陽が出てきてものすごい暑さ。奇跡的に天気にも恵まれ加えて沿道のお客さん達の温かい声援も受け、とても気持ちよくパレードすることができた。コンテストの結果は9チーム中第4位。よかったチームに携帯電話で投票するモバイル投票賞という賞までいただいた。これまでやってきて賞をいただいたのは初めてである。表彰式会場ではとても盛り上がった。テーマを決める話し合いから9ヶ月。やり終えた充実感を感じた瞬間だった。サンバは楽器やダンスが中心だがカーニバルではそれだけではなく衣装のデザインや装飾など色々な力がないと成り立たない。逆に言えば色々な人が参加できる要素がたくさんある。最初に浅草に出場した時は30人。今は90人から100人。人がたくさんいれば大変なこともたくさんあるがあの浅草の40分間の大舞台に向けて、参加する人がそれぞれのレベルでパレードを作り上げていく活動は楽しく、充実した時間である。

重山 禎弘 (音楽科)



S A M B A

こんにちは。

今年、自由の森学園サンバ音楽隊は第28回浅草サンバカーニバル2部リーグで念願の受賞を果たしました。1位、2位、3位・・・ではなく、モバイル投票賞という観客の方が気に入ったチームに投票する形式なので、受賞することが出来ました。これも立派な入賞です。

みんな、夏休みにお盆と土日を除いて毎日学校に来ていました。日々、リズム運動とバツカーダ（打楽器のみでの演奏）とエンヘッド（毎年のテーマ曲）の練習をしてポルトガル語の歌とサンバのリズムを頭と体に染み込ませていきました。一見、毎日練習で大変そうに見えますが、楽しいのでそうでもないのです！ もちろん、汗だくになって体力もつかうので、疲れはしますけどね・・・ 練習開始から間もない頃は、全体の出来はなんともいえなかったです。みんな、初めての曲をやるので当たり前ですが、期限は一ヶ月もないので、私を含めて全員必死でした。技術面以外にも、リズム運動の認識不足、ジレートル（指揮者）を見ない、指示に従わない、練習に来ない・・・ など課題は山積みでした。だけど、今年はやる気が十二分にある人が多かったため、浅草サンバカーニバル2日前くらいにはけっこう良い感じになっていました。

そして、本番当日。天気は晴れた！ と思いきや、私たちの出番の少し前から大雨が・・・。しかし出る直前になってなんと！ 晴れました。演奏中は日差しが暑すぎて痛いくらいでした。そして演奏が終わって控え室に戻り、落ち着いた頃には外はまた大雨に・・・ 他チームさんには悪いですが、お天気様万歳です！ 手作りの衣装もパシスタ（羽つきソロダンサー）の羽も、濡れずにすんで本当に良かったです。

気になる自由の森学園サンバ音楽隊の順位は、4位でした。演奏点は2位のチームと同じでした！ みんな頑張った成果なのでしょう。だけど、私はいろんな意味で今年はたぶん運が良かったのだと思ってしまいました。

最後に私のサンバに対する気持ちを少し書きたいと思います。

私は、サンバは「感じる」ものだと思っています。サンバのリズムが体に合う時の心地良さは、どうにもこうにも言葉では言い表せないですね。何ていうか・・・ こう・・・ やっぱり無理ですね（笑）

私は、サンバは「楽しむ」ものだと思っています。楽しくなければ、それはサンバではない！ と思います。もちろん楽しいだけでも良いと思っています。だけど、私は欲張りなので楽しいだけじゃ満足できないのです。やっぱり、もっと叩けるようになりたい！ と欲がたくさんでできます。

私は、これからもサンバを「感じ」、そして「楽しみ」ながら、欲深く頑張っていきたいと思っています。

最後まで読んで下さったあなたへの感謝の気持ちをこめて終わりにします。

安本 加奈子 (高3)



演劇

ぼくは中学から高校に進んできてから演劇に関わらせてもらっています。高校にあがって生活のなかでの時間の使い方がガラッと変わる人、例えば踊りを始める人、楽器を触りだす人、あるいはスポーツをやりだす人などがいると思うのだけど、僕もその仲間です。演劇に関わったきっかけのときは、その1回で終わりというような派遣会社的な感覚でのスタッフの仕事（僕を誘った人がそのつもりであったかどうかは分かりませんが）でした。でも仕事を終えて、演劇を見に来てくれた皆さんのアンケートを読んでいる時、もう僕は演劇のはなつ「暴力」にやられていました。僕は、人が魅力を感じて追いかけてしまうものには「暴力」があると思います。「暴力」をはなつものとは、スポーツであったり、異性や同性であったり、はたまた1つの物体に対してであったり様々です。それらを得るために人は頑張ります。その物を追いかけていると嫌だなと思うことともぶつかるし、自分の持っている物さえなくしてしまうことだってあるでしょう。そんなふうに入人を痛めつけておいてなお人の心をつかんで離さない。人は、あきらめたりせず必死にくらいついていく。

この前、僕は勢いにまかせて有志演劇「Moon」をたてました。終始やりたいという気持ちだけになっていて、人のはなしもまともにとらえられなくなっていました。考えが足りていなかったりして、いろんな人を困らせてしまい、申し訳ない点ばかりでした。けどやっぱり「暴力」にかないませんでした。嫌なこと、つらいことがかなり多かった公演でしたがやっぱり演劇から逃げられないのです。これからも僕はきっと演劇にひきつけられていくと思います。

急に自分のはなしをしてごめんなさい。これが今、僕が演劇に関わって考えたことです。たいした文章でもないのに、最後まで読んでくれてありがとう。ヴォイスの皆さん、誘ってくれてありがとう。こんど、皆さんと演劇の舞台上で会いたいです。では。

和太鼓いろは

この本は名前のとおり、和太鼓のいろはがわかりやすいイラストとともに太鼓をまず叩いてみよう！というところから始まり、じゃあ、太鼓の音はどうやって出ているのか、その音がどうやって伝わっていくのか。という内容をへて、最後は多分自森生なら聞いたことがあると思うぶちあわせを演じる。という内容の本です。



自分自身、部活の郷土芸能部で太鼓を教えているのだけれども、もちろん自分の教え方も使うけど、この本のことを使って教えることもある。実際、この本に書いてあることはずっと太鼓を打っている人でも「へえー」となることが詳しくわかりやすく書いてある。たとえば、自分が一番面白いと思ったのが二つの太鼓を用意して太鼓は片方の太鼓には一円玉やペットボトルのキャップとかを置いて、もう片方の太鼓を叩いてみるとどうなる

か。というもの。どうなると思いますか？

それはこの本をみてからのお楽しみなのですが・・・

ちなみに、この本の著者は体育科のまっちゃんなんです。自由の森に来て二十数年、その一日一日の授業の結晶なんだなあと思いました。

一見の価値あり。です。

板垣 奏男 (高2)



私の好きな作家 山田悠介

小説家の山田悠介は、最近話題の若手ホラー作家です。出版した本は、若者を中心に圧倒的な支持を受け、いずれも10万部を超えています。特にデビューの『リアル鬼ごっこ』は自費出版という辺境の地から出発したのにも関わらず、ついに100万部を突破するベストセラーになりました。絶大な人気から映画にもなり、もうすぐDVDレンタルも開始されます。次々と話題作を生み出していく彼ですが、まだ30歳にもなっていない若い作家がどうして支持されるのでしょうか。単なる怖い者見たさゆえの好奇心と有名さという理由で、彼の作品を手にとった私は、その理由が分かりました。

まず文章が固くありません。ほどよく分かりやすいです。ですが、荒削りな表現も目立ちます。普通はそこで愛想をつかして、ページをめくる手をとめてしまうのですが、彼の作品はそうはさせません。独特の疾走感と、文章の運びのうまさや稚拙さにまさっていたからです。ホラー作家なので、時々「うわ・・・」と思う表現がでてきますが、それもまた一興。読みはじめたら、彼の世界に引き込まれて時間を忘れて集中してしまいます。

嬉しいことが1つありました。彼の作品を読んで弟の本嫌いがなおったのです。理数系のバスケット少年なのですが、漫画しか読まない弟に何とかして本を好きになってもらおうとしてすすめた結果、「結末が楽しみですぐ読んだ」と寄ってきます。その光景に私はなんだか感動しました。『リアル鬼ごっこ』の政治の崩壊、『親指探し』のいつか聞いた怪談話のような作品とホラーのイメージが強い彼ですが、



最近恋愛物をだしました。「そのときまでサヨナラ」です。さっそく買いにいったのですが、どこに行ってもありません。とあるインタビューで、彼が最新作についてコメントしていました。「僕、ホラーっていうイメージあるじゃないですか、ですが今回はそのイメージをぶち壊してみたいと思います。期待してください！」ホラー、SF、サスペンス、そして恋愛物。ジャンルを超えて、様々な作品を生み出す彼は日々進化し続けています。今日の放課後も、最新作を探しに書店に足を運ぶとしましょうか・・・
塩瀬 七海 (高1)

「蟹工船」を読んで

「蟹工船」という作品があります。小林多喜二（こばやし・たきじ）という人が1929年に発表した小説です。プロレタリア文学の代表作としてよく挙げられます。まあそうはいいても80年近く前の作品なので戦後は大して読まれませんでした。しかし、最近またもや脚光を浴びています。それにはいくつか理由があります。雨宮処凛が取り上げたこと。漫画化されたこと。そういったきっかけがあって「蟹工船」を手にする人が増え、新聞がその現象を取り上げ、さらに「蟹工船」を手にする人が増えるというふうにして、「蟹工船」は古典としては異例の増刷というふうになったのです。僕もどのような小説なのかと思い、「蟹工船」を手にとってみました。映画のように場面が切り替わり、セリフが多用されていて昔の小説にしては読みやすいなあ、と思いました。

読んでいる最中に思ったこと。

浅川というトップの人(弾圧者)にしか名前がないんだな・・・他の作中人物は、「名も無き者たち」なのです。「千と千尋の物語」のテーマにもあったけど名前があることによって1つの存在として尊重されるわけだから名前は大切です。それが無いのはけっこう大変なことではないか、と感じました。

読み終わってみて。

いま、日本ではフリーター・ニートの人が急増し、ワーキングプア(働いても貧しい層)というものが生まれています。それらを指摘した『生きさせる!』『反貧困』や、アメリカの貧困を見つめつつも他人事じゃないぞと警鐘を鳴らす『ルポ貧困大国アメリカ』といった書籍が、次々と登場しました。そういったルポは現実を鋭くえぐり出してはいるけど、「読んで、そのあとは自分で考えて」という姿勢です。だけど、「蟹工船」は激しくけしかけます。「金を持っているやつがそんなに偉いのか?」と、問います。

作者が伝えたいと思っていることがストレートに伝わってくる小説だなあと感じました。過酷な労働状況を改善するためには、労働者が自ら立ち上がって闘うしかないんだということ。もう1つ、軍隊は支配階級(強い者)に味方し、弱い者を弾圧するものでしかないということ。その2つのメッセージは現代にも通じるものです。しかも、そのメッセージがしっかりと組み立てられた面白い物語の中にこめられている。だから、再び脚光を浴びたのかも知れないと思いました。

中島 大地(高1)

『留学から帰ってきて』

アメリカの英語の教員が僕に言った。「もしもあなたが先生になるのなら、常に " Why " の気持ちを忘れないで。宿題をしてこない子も、集中しない子も、何度注意しても同じことを繰り返す子も、学校や授業に来ない子も、みんなそういったことをするには理由があるから。それは家族だったり友達関係だったりいろいろだけど、その理由や悩みを聞いてあげられる人が家にも地域にも誰もいなければ、その子たちの声を聞けるのは先生であるあなただけかもしれない。常に結果だけをみないで、 " Why " とその子たちに聞いて。」

僕がアメリカで通っていた学校には、1クラス2、3人はいただろうか。授業に遅刻してくる生徒、教員の言ったことに反抗する生徒、いつも授業中寝ている生徒。そういう生徒たちにはそれなりの理由があった。例えば僕の友達の場合、彼の親は共働きで、家族と過ごす時間も惜しんで“彼のために”働いた。家には大きなキッチンテーブルもなく、家族でご飯を食べることは無かった。父親は家に帰ると酒を飲み彼に暴力をふるい、母親は学校から送られてくる成績だけを見て彼に罵声をあびせた。家に彼の居場所はなかった。彼は宿題をやらなくて、テスト前に勉強をすることもほとんど無く、成績はとても悪かった。

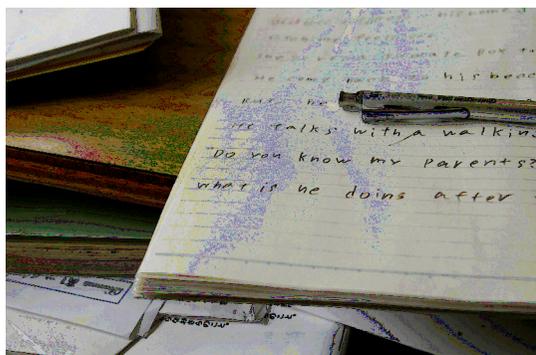
そういった生徒たちに多くの教員はこう言うだけである。「カウンセラーの所へ行きなさい。」カウンセラーというのはその名の通り生徒の心のケアをする人たちのこと。でもほとんどの人は数校を掛け持っていて、僕の学校には週2日しか来なかった。クラスから追い出された生徒は自分のカウンセラーが来ていない場合、事務

局でいないので授業に戻るようと言われるが、多くはそのままバックれて、ドラッグ“仲間”とつるむ。そういう生徒たちの多くは単位が取れず、進級できないで、転校したり退学したりする。彼らのクラスメイト（創刊号に書いたような、教員の顔色を見る生徒）は、彼らのことを「頭が悪い」と言っていた。

これは遠い外国、アメリカ合州国の話だ。でも僕はこういったアメリカの話を出すと、自由の森学園はどうだろう？と考えてしまう。自森にもいろいろな理由があって学校に来られなかったり、授業に出なかったりする人たちがいる。それでも単位を取らなければ進級が出来ず、課題をしなければ単位は貰えない。進級が出来ず学校をやめていく生徒も少なからずいる。彼らは頭が悪いのだろうか？教員は忙しそうで、会えば何も聞かずに「授業に出なよ。」という。生徒はただ無言で冷たい目を見る。もし課題を終わらせ進級できても「授業に出てないのにあがるなんてズルイよね」と言われたりする。彼らはズルイのだろうか？クラスメイトだろうが友達だろうが、その人がどんな理由で学校に来ないのか、授業にでないのか、課題をしないのか、どれだけ知っているだろう？

授業に出ないことが良いとか、全員が理解しあうべきとかそういうことが言いたいのではないけれど、もっと普通に、なんで？と聞きあうことが出来て、お互いを認めあえればいいなあと思います。それがとても難しいわけだけど。みんなはどう思いますか？VOICE あてに思っていることを書いて誰かに渡してくれてもいいし、僕に声をかけてくれてもいいので、思うことがあったら何でもいいので聞かせて下さい。

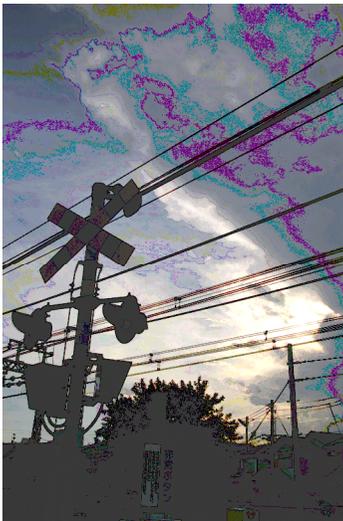
神座 想 (高3)



土曜日の朝

土曜の朝 5 : 3 5 手袋とジャンパーを着て自転車に乗って家を出る。10月に入って気温はいっきに冷えこんできた。早朝のすんだ空気の中、自転車をこぐ。人も車もない田んぼの中の道をしばらく走ると、花園橋に出る。下に流れる荒川をながめながら橋を渡る。今朝は数羽の鴨と白サギが泳いでいた。ここにこれからたくさん白鳥が飛来してくる。橋を渡って左へ曲がり少し行くと、私のバイト先のセブンイレブンに到着する。家からここまでだいたい3~4kmの道のり。朝のこの時間はこれからどんどん暗くなっていく。もう少しすると橋の上から日の出が見れる。私のバイト時間は、朝の6 : 0 0 ~ 9 : 0 0の3時間で土曜日だけ。ほんの少ししか働いていない。そのおかげかセブンイレブンのバイトを始めてもう一年4ヶ月たった。何も食べて来ないので、バイトが終わる頃にはお腹はペコペコ。早く帰って朝ごはんが食べたい。バイトを終えて、自転車にまたがり家へ向かう。早朝と変わり、車が走り空気も暖かくなっている。ジャンパーも手袋も必要ない。9 : 3 0頃家につくとちょうどお母さんが朝ごはんを作り終える頃。今日の朝ごはんは、昨日のシチュー、青菜・油あげ・じゃこの炒め物、キュウリとなすの塩もみ、林檎とレーズンのヨーグルト。ドリップコーヒーを入れるのは毎回私の役目。食卓について2人でゆっくり朝ごはんを食べる。ペコペコのお腹にとてもおいしい。土曜日の朝のこの時間は私のお気に入り。ゆっくり朝ごはんを食べ休んで11時頃。さてこれから何をしよう。1日はまだたっぷりある。早朝バイトのいいところ。

そうだ、図書館に行こうかな。



小金沢 基(高2)

今、興味があること

私はこの間『死刑』という本を読みました。普通の本より二倍くらい厚い本です。「死刑」というテーマはかなり重いし、なんか唐突な感じがします。私も読む前に少しためらいました。でも読み進めていくと、読みやすい文章だったから、どんどん読めました。

この本は、著者の森達也が、確定死刑囚や、元死刑囚、被害者など死刑について身をもって触れている人に話を聞き、著者自身も死刑について考えながら進んでいきます。私も読みながらいろいろ考えさせられました。

私は死刑について知識がなく、この本を読むまでは、完全に死刑存置がいいと思い、「愛する人を殺されたら、加害者がこの世にいることは許せないだろう」という当たり前の意見でした。現在、日本国民の約80%が死刑存置の意見を持っています。

本を読み終わったら、死刑存置か廃止か、自分の中で軽率に決められなくなりました。本を読む前は、実際に罪を犯していない人が捕まり、処刑されてしまう「冤罪」のこともよく知らなかったし、冤罪で間違っ^てて死刑にされてしまった人がいることも知らなかったから、絶対に存置と思っていたのだと思います。私はこの本を読んでその事実を知ったけれど、まだそんなに知らない人もたくさんいると思います。世界の死刑存置国を見ると、日本のように死刑を誰にも見られないようにひっそりとやっている国はあまりありません。だから死刑のことをあまり知ることができず、隠されているせいで、身近なものとして捉えられません。

死刑は本当に難しい問題です。でも私は、この問題には正解がないから、もっと死刑や刑罰について知りたくな^{った}し、そういうことに関係する職業（弁護士や検察官）に就きたいと思うようになりました。

自分には関係なさそうな問題でも、中に入ってみるとけっこう興味深い世界があったりして、おもしろいなあと思いました。

自由の森学園の問題

表現祭の問題

1

今回の表現祭の最も大きな問題は、言葉と行動の不一致の激しさだったと思います。言っていることとやっていることが異なるならば言葉への信頼は崩れてしまい、話し合いが成り立ちません。

「評価表記入期間は、生徒が自己評価表に没頭する時間。生徒は他の一切の活動を停止すること」という決定がいつの間にか反故にされ、ねぶたなどの準備が次々と始まっていました。そもそもの年間日程組み換えの理由が最初からして無視されたわけです。

生徒側は約束を破るのではなくて、「評価表記入期間に表現祭の準備をしなければ間に合わない」ということをはっきりと認識し、教員とともに話しあっていくべきだったと僕は思います。そうでなければ、自由の森学園はやったもの勝ちの無法地帯になってしまいます。

2

口から発せられた言葉は流れていきます。だから口頭ではなくて、しっかりと事実を紙上に書き留めて全校に伝えるべきです。それがないと、あとから見返して全体を反省することも出来ません。

例えば、表現祭を2日間行うという決定はそれほど議論もされずにいつの間にか実行委員会で決定されました。そして朝のホームルームの時間で軽く伝えられただけでした。いったいどういう理由で、誰のために1日分の時間が追加されたのか。全く分かりません。ほとんどなし崩しです。

3

今年の表現祭は、これまでの学園祭（自由の森学園の行事）の良い部分・悪い部分を分別しきれずに全て呑み込んでしまったように見えます。そして、参加する生徒の減少（全体の生徒数の減少と、意欲と能力を兼ね備えた生徒数の減少）に対応するために、さらにいろんな部分を切り詰めざるを得なかった（ねぶたの縮小に象徴される）縮小版と言えるのではないかと。

4

なぜ有志は、自由の森学園という場を使って、自由の森学園のお金を使って、自由の森学園の教員の手を借りるのか。全部用意されているのに有志を名乗れるのか。甘やかされたお坊ちゃま・お嬢さま集団ではないのか。という言い過ぎかも知れないが、自分たちだけで何でもできるという過信は良くないと思います。

教員が年間日程を決めて、1年間の授業や行事の流れを作っているわけです。最初から、教員の掌で踊っているといってもあながちはずれてはいない。生徒の側が年間日程の案を考えて、教員の側の年間日程とつき合わせて話し合いを重ねていく、というところまでできて始めて、「自由の森学園は生徒が主体の学校」ということをまっ口に出して言っても恥ずかしくない状況になるかも知れない、という気がします。

5

「表現祭は新しい祭りだ」と実行委員会は力説しました。しかし実際のところ、昨年の有志学園祭の延長線上の祭りといっても良いような形でした。(クラス企画があることによる)安心感はあるけど、新たな広がりを感じることは出来ませんでした。

「自由の森学園の全校生徒を巻き込み、楽しい祭りをつくる」という困難な課題に取り組んでみたり、地域(飯能)との連携をはかってみたりしてこそ、本当の「新たな祭り」への挑戦になったのではないかと。

今回の表現祭を経て、僕が思ったことの要点をまとめるとそんな感じになります。きつい表現が多いかも知れないなあ・・・ 傷ついたらごめんなさい(ではすまないかも知れないけど)。まあ文句があったらどんどん反論して欲しいです。しっかりと受け止めてなんらかの形で答えたいと思います。

中島大地(高1)



どうして「ヴォイス」を発行するのか

このごろ、自由の森学園が、たくさんの「観客」と、一部の「舞台上立つ人」に二分されている気がします。これはあまり、いいことではないと思います。いろんな人の声が表に出てこない、自由の森学園全体がだんだんと同じ色に染まっていってしまって、「多様性」や、「個性」といったものが見えなくなってしまいます。

そこで、批評紙・意見紙として『ヴォイス』を作ることにしました。

まず、ある物事をとらえるとき、生徒の視点を大切にします。大人の理屈や視点も、もちろんあるかと思いますが、まずは自分達自身のベースに戻って考えていこう、というわけです。どんなに立派な事を書こうと、まだ半人前、できないこともあります。でももしかしたら、まったく新しい視点が、ポッと生まれてくるかも知れません。そういったことを意識していけたらいいな、と思います。

それともう一つ、自由の森学園はあとの人たちに受け継ぐことがあまり上手ではない、と私たちは感じています。1回1回、いいものが出来ても、そこで終わってしまう、途切れてしまっています。しっかりと積み重ねて、つなげることで見えてくるものがあるはずなのに、それではもったいない。

『ヴォイス』とは言葉どおり、声のことです。鋭い指摘を取り上げ、小さなつぶやきも拾い上げ、その「器」として、声の発信源となっていきたいなあ、と思います。

編集 一同

Special thanks to all theGuests



Cham Cat

ヴォイス編集部

〒357-8550 埼玉県飯能市小岩井 613 自由の森学園図書館 出版相談室（大江）

Fax 042-972-6661 e-mail jb0@jyunomori.ac.jp

編集；押立敏樹（中3）佐々木優太・中島大地（高1）板垣奏男 小金沢 基（高2）

神座 想・深沢 周（高3）...次号から嶋本有里子 中3 加入 （表紙；佐々木優太）